

中東の宗教

アラブ調査室 2022年4月～2022年6月
「中東の宗教」全6回、オンライン配信

- 第1回 4月22日 総論、中東地域の独自性と宗教地図(塩尻和子、筑波大学名誉教授)
(15:00～17:00)
- 第2回 5月 6日 中東に残るキリスト教(岩崎真紀、松山大学教授)(18:00～20:00)
- 第3回 5月13日 歴史を生きる教会、エジプトのコプト正教会(岩崎真紀)(18:00～20:00)
- 第4回 5月27日 中東に残るユダヤ教(志田雅宏、東京大学専任講師)(15:00～17:00)
- 第5回 6月10日 イスラームの宗派(菊地達也、東京大学准教授)(15:00～17:00)
- 第6回 6月24日 イスラームの日常生活、多宗教共存(塩尻和子)(15:00～17:00)

第1回 4月22日 総論、中東地域の独自性と宗教地図

中東地域では今日、イスラーム教徒が多数派であるが、長い歴史の中で形成された様々な分派や独自の宗教も、少数ではあるが、現在も存在する。ニュースで取り上げられることは少ないが、これらの集団は今日でも**中東地域の文化や伝統を下支えしており**、政治問題にも大きな発言力を持っている。中東で生きる宗教の諸派が、共に困難な時期を乗り越えてきた歴史的事実を学ぶことは、世界情勢を学ぶことにつながる。今回の講座では、中東地域に根付いている**少数派とその周辺**について、長年、研究をしてきた専門家とともに、わかりやすく学ぶ機会とする。現在では、後進地域のように見なされるが、中東地域はこの**人類史上最古の文明**を作り上げた地域である。そのために、古代から受け継がれた多くの文化や宗教、伝統や風俗習慣などが、現在も世界のあちこちに残っている。その中に、メソポタミアで発生した各種の宗教的伝統とそれに付随する文化的伝統が今日の宗教にも残っている。

ペルシア湾に近いウルのジググラトは紀元前2100年頃、ウル第3王朝の初代王ウル・ナンムが建造した初期の宗教施設だとされている。最上部に月神ナンナを祀る神殿が築かれていた。ヘブライ語聖書（旧約聖書）の創世記に述べられているバベルの塔も、ジググラトの一種であったとみられる。



1－1, 中東地域の独自性と宗教地図(1)

最古の文明の発祥地(1)

中東地域は、人類の文明史上、最古とされる都市文明、メソポタミア文明が発生した場所である。ティグリス・ユーフラテス両河流域に前3400年頃、都市文明が成立した。この地域はエジプトと並んでオリエント文明の中心地域となる。シュメール人、セム語系、インド＝ヨーロッパ語系などの民族が興亡し、バビロニア、アッシリア、ペルシア帝国などの古代国家が成立した。

メソポタミア文明は、人類史上、最初の農耕や牧畜を開始し青銅器を開発して武器や道具をつくり、楔形文字を用いて文書を残し、初期の宗教儀礼を制定し、ギリシア・ローマに受けつがれる60進法や陰暦の暦なども発明した。その後、数千年にもわたってオリエント一帯に伝播することになる神話をも編み出した。これらの神話の中にはヘブライ語聖書にも受け継がれているものも少なくない。



1－1，中東地域の独自性と宗教地図(2)

最古の文明の発祥地(2)

右は東側のティグリス川(全長1,850km)。左は西側のユーフラテス川(全長2,800km)。両方共下流のバスラ近郊で合流してシャットル・アラブ川となってペルシア湾に注ぐ。流域の風景はどちらの川もそれぞれの地域で互いに似通った自然の景観を提供する。この写真はそれぞれに異なる地域での写真であり、どちらかの河川の独自の風景ではない。



1-2、中東の古代地図

古今東西の宗教は、そのほとんどが多神崇拝であるが、ユダヤ教をはじめとして、世界三大一神教が発生したのもこのメソポタミア一帯、つまり中東地域である。したがって、中東の宗教を語ることは、世界の宗教と文化を語ることにつながる。今日でも解明されていないことも多く、古代には両大河は合流していなかったとみられる。ヘブライ語聖書によると、族長アブラハムはペルシア湾に近いウル(カルデアのウル)に住んでいたとされる。紀元前597年と586年にはユダヤ人のバビロン捕囚が発生したが、先祖の土地に近い場所であったようだ。



1－3、中東の歴史的特色・文字の作成

紙が作られる前に、この地では**楔形文字**が用いられていた。楔形文字は、多くの場合、粘土書板に記されており、紀元前3400年頃の文書も残っている。パピルス紙や羊皮紙のように焼けたり腐敗したりすることのない楔形文字は、今日、ヨーロッパの博物館などに大量に保存されており、すべての解読にはまだ長い時間がかかるといわれる。

現在では、後進地域のように見なされるが、中東地域はこの人類史上最古の文明を作り上げた地域である。そのために、古代から受け継がれた多くの文化や宗教、伝統や風俗習慣などが、現在も中東地域のあちこちに残っている。その中に、メソポタミアで発生した各種の宗教的伝統とそれに付随する文化的伝統が今日の宗教に受けつがれている。

『ギルガメシュ叙事詩』は、古代メソポタミアの文学作品。実在していた可能性のある古代メソポタミアの伝説的な王ギルガメシュを巡る物語。現在までに知られている歴史の中で、最も古い作品。右の写真のように粘土板に楔形文字で書かれている。ヘブライ語聖書に出てくる「ノアの箱舟」の原型とされる洪水物語が含まれている。

（『ギルガメシュ叙事詩』月本昭男訳、岩波書店）



1-4、現代中東の宗教分布図

「宗派の略号」 ス:スンナ派、シ:シーア派、キ:キリスト教、イ:バーディー派、
中東・北アフリカ・中央アジア・南アジアのイスラム教宗派の分布



作成:青山貞一
元地図:グーグルマップ

ヒズボラ = 大部分がシーア派 ISIL = 大部分がスンナ派

1－5、現代の「中東」の概要

呼称「中近東」「中東」「近東」

この地域の呼称は時代によっても定義はあいまいであるが、これらは近代になってヨーロッパからみた距離をもとに命名された地域名である。今日の中東は、西アジアと北アフリカからなる地域であるが、アフリカ、アジア、アメリカのように地理的名称がつかない。地理的状况としては、前述のように、ほぼ、メソポタミア文明と古代エジプト文明が発生した地域にあたる。近代では、オスマン帝国の領土のうち、17世紀の最大版図から最東のアゼルバイジャンと、最北のウクライナとハンガリーを除く広大な領域に相当する。

近代でも時代ごとに呼称も範囲も異なる。

- ・第1次世界大戦まで:「近東＝旧オスマン帝国領」「中東＝イラン、アフガニスタン」を指していた。
- ・第2次世界大戦まで:「中近東＝旧オスマン帝国領、イラン、アフガニスタン」
- ・第2次世界大戦以降:「中東＝アラブ地域(西アジア・北アフリカ)、トルコ、イラン、アフガニスタン」

使用言語

西アジアや北アフリカでは、アフロ・アジア語族セム語派に属する言語、アラビア語が話される。主にトルコで話される現代トルコ語はチュルク語族の一つである。イランを中心に話されるペルシア語は、インド・ヨーロッパ語族、インド・イラン語派、イラン語群に分類される。

アラビア語—西アジア、北アフリカ

トルコ語—トルコ、中央アジア、カフカース地方(チュルク語圏)

ペルシア語—イラン、アフガニスタン、タジキスタンなど

1－6、現代の中東の宗教と文化

中東の宗教と文化

現在では**90%以上の住民がイスラーム教徒**、少数(10%以下)のキリスト教徒、ユダヤ教徒、その他が住む。イスラームを国教として認めている国も多い。文化的には、イスラームという基盤と、それぞれの地域の伝統文化が融合している。**古代メソポタミアの宗教と古代エジプトの宗教の性質を残す多文化・多宗教地域である。**

中東と呼ばれる地域はアラブ系住民が多数を占めている国々（サウジアラビア、アラブ首長国連邦、イラク、シリア、レバノン、ヨルダン、エジプトなど）を主とし、若干の非アラブ国（アラブ系人種ではない多民族が居住している国）として、トルコ、イスラエル、イラン）を含む。

ただしレバノンでは**キリスト教徒（主としてマロン派）が住民の約半数に達し**、また全域にわたってコプト正教徒、シリア正教徒、ネストリウス派のアッシリア東方教徒、アルメニア正教徒、ギリシア正教徒、ローマ・カトリック教徒などのキリスト教徒が散在する。非アラブ国では、トルコが政教分離を行なったが、イスラーム教徒は依然として人口の99%と多い。イスラエルはユダヤ教徒が70%以上と多数を占め、イランにはイスラームの分派のシーア派教徒が90%と多い。

ユダヤ教、キリスト教、イスラームといった同じセム系の伝統上に発生した一神教の出現以前は、この地域には**多種多様な多神教**が存在していた。ナイル河畔の古代エジプトでは太陽神崇拝や自然神、動物神の崇拝が行われ、多くの神話、祭式が一神教の登場まで続いた。

現代でも、イスラームのほかに、キリスト教、ユダヤ教とそれらの分派や古来の伝統を守る少数の宗教集団の存在もある。

1-6、ユダヤ教の始まり(1)

ユダヤ教

最初の一神教とされるユダヤ教は、各種の多神教が存在する中で、一柱の神だけを選んで自らの民族神として崇拝することを決定した宗教で、その神との契約によって、特定の民が神に選ばれた選民となり、神が与える約束の地を目指すという、神との関係性が成立したものである。一般にはヘブライ語聖書(旧約聖書)の記述に従って、紀元前2000年ころ、ユーフラテス川のほとりで牧羊を営んでいた族長アブラハムが唯一の神ヤハウエのみを信仰するようという命令に従って、この神と契約を結び、自らのヘブライの民が神によって選ばれた特別な民であり、この民が繁栄する場所として約束の地カナンを与えられたことから始まる。

この「アブラハム契約」では神は一方的にヘブライ人の人口を増やし、約束の地カナンを与えたとされる。しかし「約束の地を与える」という契約は、本来、黙っていても与えられる土地ではなかった。「約束の地」に到着するまでには、ヘブライ人たちは移住していった各地で先住民たちとの命がけの戦いを繰り返していくことになる。

ユダヤ教において神の存在は、ユダヤの民が律法を遵守することによって初めて実現するのである。つまり、ユダヤ教の神は、限定された神であり、イスラエルの民にとってのみ唯一の絶対者であり、天地の創造主であり、歴史を支配する人格神なのである。

そのために、ユダヤ教はイスラエルの「民族宗教」とも言われる。この「神とユダヤ人」の特殊な関係は、現在のラビ・ユダヤ教においても変わることはない。

右の写真はモーセが神から十戒を授けられたとされるシナイ半島のモーセ山の山頂。



1-6、ユダヤ教の始まり(2)

創世記の記述に従って建設されたのか、パレスティナのヘブロンにはアブラハム一族の墓所「マクペラの洞窟」がある。左側の墓所に「われらが父、アブラハム」と札が掲げてある。右側には「われらが母、サラ」の札がある墓所もなっている。近くの広間にはアブラハムの息子イサクとその妻リベカの墓もある。1994年には極右のユダヤ人によるテロが起き、礼拝中のムスリム29名が犠牲になった。以降、付属施設として設置されているシナゴグは現在でもイスラエル軍の警備隊によって厳戒態勢が敷かれている。

この墓所は第2神殿時代(BC560年ころ)に建設され、その後何度も修復された、と伝えられている。現在、墓所の管理はムスリムが行っている。



1-7、キリスト教の始まり

ユダヤ教の改革者イエス

ユダヤ教の神は、イスラエルの民にとってのみ唯一の絶対者であり、歴史を支配する人格神であり、天地の創造主なのであるが、この限定された「神」を、生ける神として万人の父となしたのがキリスト教である。ユダヤ教徒ナザレのイエス(BC6/4頃～AD30頃)が、厳格な戒律に疑問をもち、ユダヤ教の改革を目指して、戒律を超越する信仰を説いてまわった。神を「父のような身近な存在」とであるとみて「神の国」の教えを広め、下層階級から熱狂的に支持されたことから始まる。

左の写真はエルサレムの聖墳墓教会内にあるイエスの十字架の場所で、ゴルゴダの丘とされる場所。右は階下にあるイエスの墓、イエスは三日後にここから蘇って天に上ったとされる。

(キリスト教宗派間の争いを避けるために、聖墳墓教会もムスリムが管理している。)



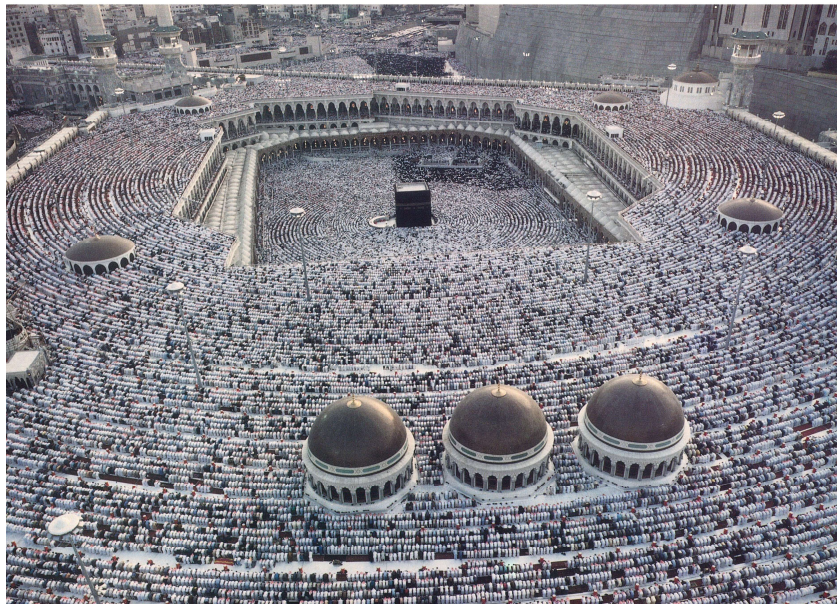
1-7、イスラームの始まり

都市の宗教

イスラームはアラビア半島の商業都市マッカ(メッカ)で興った一神教である。商人であったムハンマドが神の召命を受けて預言者となり、610年に宣教活動を始め、彼が死ぬ632年までに神から授かった啓示をもとにして展開した。ムハンマドが、生地マッカでの迫害を逃れるためにマディーナ(メディナ)へ移って本格的に教団を設立した西暦622年の元日7月16日をヒジュラ暦(イスラーム暦、完全な太陰暦)元年とする。

ムハンマドは宗教的指導者であるばかりでなく、政治的指導者としても能力を発揮し、宗教集団は同時に政治集団ともなった。創始者ムハンマドが商人であったことから、イスラームは**商人の宗教・都市の宗教**として発展した。為政者たちは他文明からであっても実利になるものを受け入れて、他宗教との共存を図り、壮大なイスラーム文明を興した。

右はエルサレムにある「岩のドーム」、エルサレムはユダヤ教・キリスト教・イスラームに共通の聖地、左は義務の巡礼(ハッジ)時のマッカの様子、世界中から400万人もの信者が集まる。



1－8、三宗教共通の伝統

アブラハムの宗教

イスラームは、共通の祖アブラハムに由来する宗教として、ユダヤ教、キリスト教と同一の「セムの」伝統を持つ兄弟宗教である。イスラームでは、ユダヤ教徒とキリスト教徒を神が啓示した同種の聖典をもつものとして「**聖典の民**」(啓典の民)と呼び、イスラームの支配地域では一定の税金(**人頭税、ジズヤ**)を科して信教、居住、職業の自由を保障した。イスラーム社会の税金としては、その他に、土地を持つ**全住民に課す地稅(ハラージュ)**があり、イスラーム以外の宗教の信者は、**人頭税と地稅の両方**を払う義務があった。

近年までイスラーム国家内では教育、文化、金融業などの担い手として特に**ユダヤ教徒**や**ネストリウス派のキリスト教徒**が活躍した。1948年のイスラエル建国後でも中東・イスラーム地域に少数ながらユダヤ教徒やキリスト教徒が住む。イスラームとユダヤ教とは長年にわたる「父祖伝来の仇敵」であるという表現は歴史的にも宗教的にも根拠がない。実際に1948年のイスラエルの建国まではユダヤ人との平和的共存が続いていた。「右手にクルアーン(コーラン)、左手に剣」という西洋的な誤解と偏見は現在でも根強いが、イスラームが武力を背景に改宗を迫った事実は、ほとんど見られない。初期イスラームの急速な拡大の理由としては、イスラームの支配が、当時のビザンティンの支配に比べて政治的な抑圧が少なく、税金の率も低かったということが挙げられる。また前述のように**信教の自由**を認めており、宗派間の論争(特に三位一体論)には関与しなかったので、中東地域のキリスト教徒がイスラームによる支配を支持したことも大きな理由である。

とくにユダヤ教徒にとっては、中東でもイベリア半島でも、イスラーム支配下での暮らしは安定していた。今日まで続くラビ・ユダヤ教のシステムが成立したのは、この時期である。

1-9、メソポタミアの伝統を受け継ぐ少数派

中東の宗教と文化

現在の中東地域では、90%以上の住民がイスラーム教徒、少数(10%以下)のキリスト教徒、ユダヤ教徒、その他が住む。イスラームを国教として認めている国も多い。文化的には、イスラームという基盤と、それぞれの地域の伝統文化が融合している。古代メソポタミアの宗教と古代エジプトの宗教の性質を残す多文化・多宗教地域である。

特に古代の宗教に起源を持つ**ゾロアスター教(拝火教)**、**マニ教**、**マンダ教**、**ミトラ教**、**ヤズィード教**などがある。絶滅したと伝えられるが、ゾロアスター教、マンダ教などは現在でも信徒数が10万人と伝えられるように、その文化的伝統は引き継がれていると考えられよう。

ヤズィード教は、昨今、IS(イスラーム国)などから悪魔信仰を持つ多神教であるとして攻撃や虐待を受けたというニュースが世界中に知られるようになったが、イラク北部に住むクルド人の一部で信仰されている一神教である。メソポタミアの伝統やユダヤ教・キリスト教・イスラームの伝統なども取り入れているが、外部への伝道は行わず改宗も許可されないので、実体はよくわからない。

そのほか、イエス論に関して、**カルケドン決定に同意しないキリスト教分派**が、中東地域には古くから存在している。**ユダヤ教にも超正統派**、**イスラームにもシーア派に属する少数派**の存在も認められている。

中東地域に現存する少数派の多くは、何らかの形で古代メソポタミアの伝統を受け継ぐ宗派が多く、特にキリスト教については、異邦人伝道以前のイエス時代のキリスト教の伝統を受け継いでいる宗派も多く、興味深い。これらの「中東の宗教」については、第2回以降の専門家の解説を期待されたい。

参考資料:カルケドン決定(中東に残る非カルケドン派の教会を理解するために)

カルケドン決定(Chalcedonian Definition、日本ではカルケドン信条と呼ぶ)の効果

イエスの刑死後、彼を救世主キリストとする受難の「神の子」論が展開され、やがてイエスが神であると同時に人であるという、独特の「三位一体論」が定着していくことになる。三位(父・子・聖霊)のうち、論争の的となるのは「父と子」の関係である。三位一体論は殆どの主流キリスト教会派に採用されたが、中東に残る小規模の教会はこれに反対の立場を取っている。中東の教会は、それぞれの民族色を保持しながら、独自の教理を展開する。一方、人間イエスに神性を付与したことによって、キリスト教はユダヤ教から明確に独立するとともに、厳格な一神教を奉じるイスラームとも対峙する。イスラームではイエスは優れた預言者とされる。

「カルケドン信条」キリスト教大事典、2000年、教文館

されば、我らは聖なる教父らに従い、すべて相一致して、一にして同じき子、神性においても同じく完全、人性においても同じく完全なる我らの主イエス・キリストを告白すべきことを人々に教う。主は真に神にして真に人、同じく理性心と肉体とを持ち、神性によれば父と同質(ホモウシオス)、人性によれば我らと同じく同質、罪をのぞくほかはすべてのことにおいて我らと相似たり。神性によれば万代の前に父より生まれ、人性によればこれらの末の日、神の母、処女マリアより我らのため、我らの救のため生まれしなり。一にして同じき、キリスト、子、主、独子は混交なく、転化なく、分割なく、分離なく、存在する二世のうちに認められるべし。二世の区別は融合によりて取り去られるにあらず、むしろ各性の特質が保存せられて一の人格と一の位格のうちに併存し、2つの人格に分離・分裂されず、一にして同じき子、一人子、ロゴスなる神、主イエス・キリストにして、預言者らの当初より述べ、主イエス・キリストは自ら我々に教えたまい、また教父らの信条の我々に伝えしがごとく。

参考資料、中東、メソポタミアの歴史を語る「犬の川」(1)

レバノンの首都ベイルートの北方18キロにある「犬の川」はジェイタ鍾乳洞を水源として31キロ、地中海に流れ落ちる小川である。この犬の川と呼ばれる川の急峻な両岸に紀元前1500年から紀元後の2000年までの間、東西からやってきた時の国王や将軍たちが遠征軍を率いてこの川を無事に渡ったという**勝利の記念碑**が刻まれてきた。現在のところ、石灰岩に刻まれた20基の石碑が残されていて、そのうち17基が今でも判読できる状態にある。

最も古いものはラメセス2世の石碑を含む3基の古代エジプトの記念碑であり、最も新しいものはレバノンからイスラエルが撤退した2000年の記念碑である。

この間に挟まれるように、新アッシリアのエサルハドン王や新バビロニアのネブカドネザル2世、ローマ帝国のカラカラ帝、イスラーム時代のマムルーク朝のスルタン・バルクークの石碑、近代にはいるとナポレオン3世によるレバノンの植民地化、1920年のフランス軍のシリア侵攻、レバノンの独立と第二次世界大戦の連合軍のレバノンからの撤退を記念する1946年の石碑など、そして最も新しいものは2000年のイスラエル軍の撤退を記念する碑文である。

3500年もの間、レバノン地域の周辺で東西に軍事力を誇示した軍隊の多くが、この難攻不落の岸壁を超えることができたことを誇って、急峻な川岸の石灰岩に20基を超える勝利の記念碑を残して行ったことは、不思議な歴史現象である。これは現代の私たちに何を語ろうとしているのか。ここには**地球の東西の要**としての「中東」と呼ばれる地域のもつ歴史と神秘の象徴が表現されているように思われる。

犬の川の石碑は、レバノン1国の歴史を超えて、中東と呼ばれる地域に生きた先人たちの記念碑でもある。

参考資料、中東、メソポタミアの歴史を語る「犬の川」(2)

(写真は https://en.wikipedia.org/wiki/Stelae_of_Nahr_el-Kalb; [Lykos \(Nahr al-Kalb\) – Livius](#); [Commemorative stelae of Nahr el-Kalb – LebanonUntravelled.com](#) による。)

レバノンの「犬の川の記念碑」はユネスコの「世界の記憶」に登録されている。

下の写真は、左が現在の高速道路のトンネル入り口、左の山肌に石碑が見える。右の写真は石碑の案内板。最近は見学路が整備されている。



参考資料、中東、メソポタミアの歴史を語る「犬の川」(3)

左は犬の川の遠景、石碑は1基を除いて、すべて南側に設置されているので、右下に見物用の道路が見えることから、おそらく川は手前(西)に向かって流れ、東地中海に注いでいる。右の写真はマムルーク朝のスルターン・カラウーン(在位1279-1290)が建設した石橋。



参考資料、中東、メソポタミアの歴史を語る「犬の川」(4)

左の写真は新アッシリア王国のエシャルハドン王(在位：681BC – 669BC) 王がエジプトのメンフィスを占領したことを記念する楔形文字で記された石碑。新バビロニア王国と新アッシリア王国の石碑は合わせて6基もあり、石碑はこの写真のように、エジプトのファラオ(ラメセス2世)の石碑にくっついている例が多い。右は1799年に描かれたエッティングで、当時の見物客の様子を描いている。絵の右端には地中海が描かれているが、実際の風景とは異なっている。



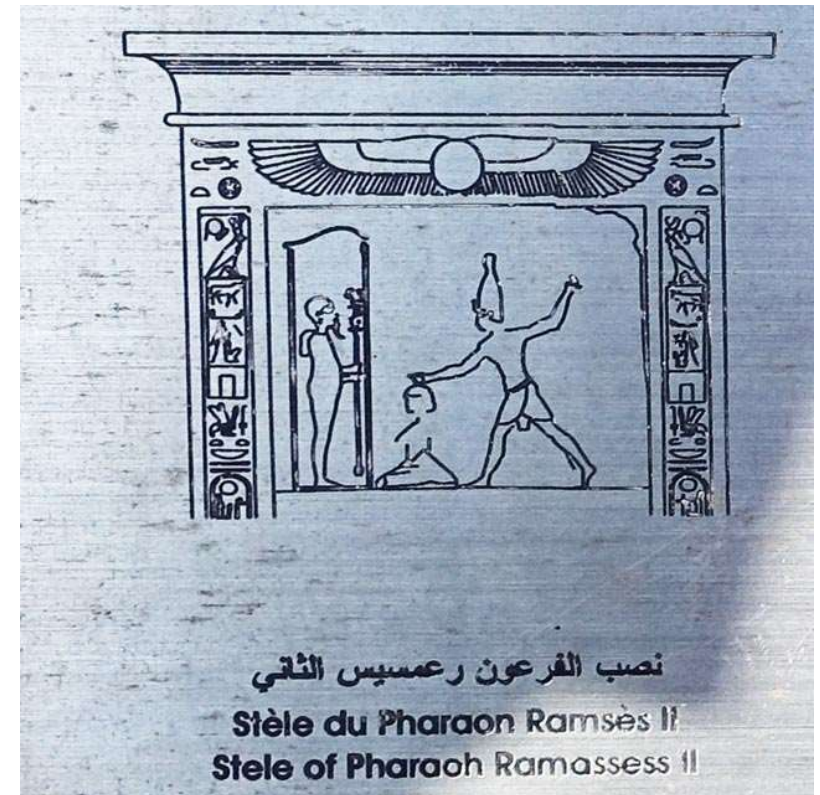
参考資料、中東、メソポタミアの歴史を語る「犬の川」(5)

左はローマ帝国のカラカラ帝(在位209―217)に捧げられた石碑とされる。右はマムルーク朝のスルターン・バルクーク(在位1382―1399)の記念碑。



参考資料、中東、メソポタミアの歴史を語る「犬の川」(6)

左は、ナポレオン3世(在位1852年～1870年)の石碑、ナポレオン3世がかかわったフランスの最初の植民地支配の記念碑、ナポレオン3世の石碑がエジプトのラメセス2世(1279BC頃～1213BC)の碑文を削って刻まれたことを説明する解説版が石碑の脇に置いてある。



参考資料、中東、メソポタミアの歴史を語る「犬の川」(7)

左は、1946年、第二次世界大戦の軍隊が撤収した記念碑。

右は、イスラエル軍がレバノンから撤退した記念碑で2000年に設置。



右の石碑の上に飾りのようなものが見えるが、偶然かぶさった木の枝のようである。他所の写真には見られない。